

「みんなの日本語」の教材を使った授業

名須川典子

日本語センター（インド・デリー）

はじめに

日本語を教える際、まず大切なことは、「どこで」「だれに」「どのような目的で」教えるかを考えることだと思います。「どこで」教えるかを考えただけでも日本国内で教えるのか、海外で教えるのか、また、日本国内でも、東京で教えるのか、大阪で教えるのか、また他の地方都市で教えるのかで違いが出てくると思いますし、海外では教える国によって更なる大きな違いが出てくるのは明らかです。また、海外の場合は、日本語教師が日本人なのかどうか、日本人の場合、日本語以外の外国語を習得しているのか、教授経験がどのくらいあるのか、日本人以外の場合、日本語のレベルはどのくらいなのか等、教える側の条件で教え方も変わってくるのが実情です。私の場合は、インドの首都、ニューデリーで日本語を教えて25年たちました。

ですから、これから書かせていただくことは、あくまでもインドのニューデリーにおける「みんなの日本語」を使った日本語教育の実践であるということをご了承ください。しかしながら「日本語学習者数」を見ると、その数は海外における日本語学習者数が、国内の日本語学習者数を大きく超えています。例えば、2015年度では、海外における日本語学習者数は、3,651,715人（2015年度海外日本語教育機関調査結果、国際交流基金）に対し日本国内のそれは191,753人（2015年度日本語育実態調査、文化庁）となっています。（但し、日本国内の調査では、初等・中等教育機関は対象外としています）日本語教育を考える際は、国内の教育とともに海外での日本語教育を考えなければ、「日本語教育」というものを語っていることにならないのではないかと思います。

1. 日本語センターの概要

まずは、簡単に日本語センターの概要をお伝えしたいと思います。日本語センターは、インドのニューデリーに位置し、創立16年の非営利日本語教育機関です。現在、学生数が年間のべおおよそ800名となっており、インドでも規模が大きい日本語教育機関となっています。学生はほとんどがインド人ですが、時々、韓国人や中国人、インドネシア人、アメリカ人、イギリス人等が在籍しています。学生の年齢層は、18歳から30歳ぐらいで、日本語学習の動機は、「日本語を使って仕事をしたい」という人が大部分を占めています。日本

語の授業は、週末コースから週3日のコース、毎日のコースまで様々で、学生のニーズにできるだけ合うような形で組んでいます。通常、1コースの総時間数は100時間で、日本語能力試験のレベルごとの時間数は、200時間になっています。1日の授業時間は、3~4時間となっています。クラスの人数は、大体15名から40名です。日本語センターで教えているレベルは、日本語能力試験でいうN5レベルからN1レベルまでのすべてのレベルで、N1レベルに至るまで、多くの合格者を出しております。また、日本語の会話能力を高めるための会話コースも実施しています。これらの会話コースは、日本語のレベル別分かれていて、既習事項をどのように使って運用、コミュニケーションレベルを高めていくか、ということに重点を置いています。

日本語センターの多くの卒業生が、日本語を使って現在、インドにある日系企業や日本関連会社、日本国内の会社に勤務しています。

これらのコースとは別に、すでに企業で働いているエンジニアの人たちにも、日本語研修を実施しています。日本語研修の目的は様々ですが、①日本で働く・研修する②日系企業のため、日本人とのコミュニケーションが必要③日本から出張者が来たとき、コミュニケーションがとれないと困る④日本語の専門職として勤務しているが、もっとレベルをあげる必要がある等が主な目的となっています。

2. 「みんなの日本語」について

このような状況の中、日本語センター設立当初から「みんなの日本語」を一貫して授業で使っていますが、同教材の優れていると思われる点は、主に

- ① 彙や文型、運用、表現まで日常生活によく使うものを意識して扱っている
- ② 文型積み上げ型の教科書であり、各文型ドリルがよく整理され、わかりやすく、充実している。特に教授経験が浅い教師、ノンネイティブの教師にとっては、ドリルをどのように行えばいいかがわかりやすく示してあり、独自のドリルを作成する指針になる
- ③ 練習Cなどの会話も紹介されており、習得した文型をどのように運用するか、コミュニケーションに使っていくかなどもシンプルに示してあり、基本から展開できる教材が提供されている
- ④ 各課の文法説明が英語や他の外国語でされているので学習者にも理解しやすく、教師にとっても外国人の目で捉えるいい機会となっている。また、授業を欠席した学生にとっても自習するための有用な教材となっている
- ⑤ リスニングや会話ビデオのみならず各課対応の絵カードや練習C・会話イラストカードなどの周辺教材が整っており、スムーズな授業の手助けとなっている

- ⑥ 教科書そのものは、文型積み上げ型であるが、使い方を工夫すれば、コミュニカティブアプローチにつなげていける、などです。

3. 「みんなの日本語」を使った授業

日本語センターでは、「みんなの日本語」を使用して、下記のように各課を授業を進めています。

- 1) 語彙の導入
- 2) 絵カードで練習
- 3) 文型の導入
- 4) 導入の確認
- 5) 板書+文法説明
- 6) ドリル（口慣らし、反復ドリル、転換ドリル、代入ドリル、変換ドリル、結合ドリル、拡張ドリル、展開ドリル、完成ドリル、応答練習等）
- 7) ゲームなどのアクティビティを随時紹介
- 8) 練習Cに基づく会話練習
* 3～7を文型ごとに繰り返す
- 9) 文型・例文（本文を音読）
- 10) 会話（ビデオも見せる）
- 11) リスニング（問題）
- 12) トピックを与えて会話練習（練習C参照）
- 13) 練習Bと問題（リスニング以外）は宿題にして、次回の授業で提出する

語彙の導入の際、絵カードを使用して、語彙の定着を効率的に行いますが、絵カードは語彙を覚えるのみならず、助詞を学生に考えながら言ってもらう方法で練習し、更には授業を通して文型の練習の際も大いに使用し、語彙の定着から助詞を経て文型まで関連付けて頭に入れられるよう工夫しています。絵カードがあるとビジュアル効果で効率的に授業を進めることができ、また、「みんなの日本語」の周辺教材として、すべての課を通して絵カードがそろっているのです。新しい課に入るときだけでなく、前回の課の復習、また、前々回の課の復習、または総復習に使う時などにも、効果的に使うことができ、非常に役立っています。

文型の導入は、その文型が使われるシチュエーション（場面）を簡単な日本語、もしくは英語かヒンディー語で示し、導入した内容を学生に積極的に考えてもらい、ある程度理解できたかどうかを確認してから、板書、文法説明を行います。教師が、次々と説明して

いくのではなく、まずは学生自らに考えてもらい、学生が「受身」になって日本語学習をしないように気をつけながら進めていきます。しかしながら、授業時間は限られていますので、各課を効率よく進めなければなりません。そのため、新文型紹介では、できるだけ余計な時間はかけずにシンプルでわかりやすい説明を心がけ、細かいことは、その後のドリルを通して、その文型の使い方を練習しながら、少しずつ紹介して練習しながら習得してもらおうようにしています。つまり、ドリルは単なる文型練習としてのものではなく、文法のコンセプトを理解した上で、「自ら実際に使いながらその文法の使い方を習得」し、教師は、学生の習得状況を注意深く観察しながら、少しずつ新しい要素をドリルに足していくのです。そして、文型ドリルから運用練習につなげ、ひいては、その文型を使ってコミュニケーションができる練習にまで拡大していくものです。

例えば、第14課のて形で「～を～てください」を扱うとき、語彙習得後、「積み上げ式」「運用練習」そして「コミュニケーション」の練習までどのように実践しているかを下記に示したいと思います。

- 1) 「て形とは何か」を説明する。
- 2) て形の作り方を動詞3グループ、2グループ、1グループの順に説明する際、各グループのて形の作り方をそれぞれ紹介した時点で、そのグループのて形の作り方を練習してもらおう。最後に3つのグループ全部の動詞をグループの枠をはずして練習して、て形の作り方がわかるようになってもらおう。
→「積み上げ式」
- 3) 次にて形を使った文型「～てください」の導入をする。実際にこの文型がどのようなシチュエーション（場面）で使われるかを示し、学生に予想してもらおう。導入が理解できたかどうかを確認後、その文型を板書し、やさしい日本語、また英語かヒンディー語を使って文法説明をする。
- 4) ドリル練習で、ます形→て形→「～てください」につなげていく。
→「積み上げ式」
- 5) アクティビティとして「～てください」を使ってペアワークをする。
→「運用練習」
- 6) ドリルに意味を持たせるべく、「(すみません。)～から、～てください」など、理由を入れた文章にしたり、それができるようになったら、「～から」にあたる部分

だけを示して、学生自身がそれに続く文を意味やシチュエーションを考えながら作り、言ってもらい練習につなげていく。 → 「運用練習」

- 7) やさしい日本語もしくは媒介語でシチュエーションを説明。学生にそのシチュエーションでこの文型を使ってどんな文で表現したらいいか考えてもらい、言ってもらい。 → 「運用練習」

(「みんなの日本語」練習A、B参照可)

- 8) シチュエーションを示して、一文だけではなく、会話に組み立てていく過程で、その文型および既習の文型を使って会話を作っていく。

→ 「運用練習」

→ 「コミュニケーションレベルの練習」

(「みんなの日本語」練習C参照可)

* 随時、ゲームやアクティビティーを採用することによって、学生にその文型に親しみを持ってもらい、楽しく習得することでモチベーションを高め、確実に覚えてもらう。

→ 「運用練習」

更に企業研修においては、各課が終了するとともに、語彙・文型試験を実施するほか、教科書の文型・例文を音読を伴って覚えたかどうかを確認する「発話テスト」を実施しています。これは、目で読んで勉強しているだけだと、話せなくなってしまう傾向にあるため、音で認識することを促すためです。また、宿題（練習B、問題）のチェック、間違えた問題は正解を示さず、自力で直してもらいようにして、全問正解になってから、別途、その課の復習試験を実施しています。 → 「積み上げ式」

- 9) 前述の積み上げ式、運用練習をした上で、3~4人のグループに分け、トピックを与え、各グループで会話を作ってもらい、自分たちでアクション・演技を加えた練習をし、全員の前で発表してもらい。その時に、メモ等は見ないで実践してもらい。また、会話作成の際、疑問点があれば、教師に質問するようあらかじめ言うておく。

→ 「コミュニケーションレベルの練習」

- 10) 各グループの会話発表を見せてもらった後で、他のメンバーおよび教師からのフィードバックをする。その時に、文法的な間違いよりも運用的・コミュニケーションにおけるポイントにフォーカスする。

→ 「運用練習」

→ 「コミュニケーションレベルの練習」

- 1 1) 全グループにフィードバックをした後で、再度グループ毎に話し合ってもらい、より自然な会話に作りかえて、もう一度、全員の前で発表してもらおう。
→「運用とコミュニケーションレベルの積み上げ式」
- 1 2) 前のトピックと比較的近いトピックを与え、再度会話を作ってもらって、全員の前で発表してもらおう。
→「運用とコミュニケーションレベルの積み上げ式」

ここで、特記しておきたいことは、語彙・文型の積み上げ式練習がきちんとできていないと、いくら運用練習をしても、文型に関わる間違いが多くなり、意味不明の文になってしまったり、発話がしどろもどろしなってしまう、何を言っているのかわからない状態になってしまうことが多いということです。そのため、たくさん練習してもお互いに日本語でコミュニケーションできるまでのレベルになかなか達することができません。また、何とかコミュニケーションができて、単語のみで答えたり、助詞を省略して話すのが習慣になってしまい、きちんとした完成文での発話ができなくなってしまうという危惧もあります。従って、あくまでも、語彙・文型の積み上げ式の練習をきちんとし、基礎となる部分を「ある程度」確立した上で運用およびコミュニケーションの練習をした方が、効果的であると思われます。しかしながら、積み上げの段階で、教師があまりにも正確さを求め、些細な間違いも執拗に直し続け、積み上げのみに重きを置いた練習ばかりしていると、学生が自由に日本語で発話をすることができなくなり、正確な日本語の文は話せるが、運用やコミュニケーションが全くできないようになってしまう恐れがあるので、ここは注意したいところです。

4. 「積み上げ式」から「運用練習」「コミュニケーションレベルの練習」へつなげるメソッドのケーススタディ

当センターのコースで学習している学生たちは、このように積み上げ式→運用練習→コミュニケーションレベルの練習へとつなげていくことにより、海外で日本語学習をしているにも関わらず、短期間で日本語を習得しています。「みんなの日本語」の教科書は、日本国内で日本語の勉強をしている学生のようにいつも日本語で生活できる環境ではなく、授業以外では、なかなか日本語を使う機会がない学生にとって、日本語学習では欠かせない基本語彙、基本文型をきちんと示し、積み上げ式に練習するようになっているので、日本語学習の土台の部分がきちんと形成され、運用やコミュニケーションへつなげていけるものになっています。しかしながら、前述の通り、基礎の部分が積み上げられていない学生は、いくら運用練習やコミュニケーションの練習をしても上達が遅々としていて、なかなか

か見えてきません。運用練習やコミュニケーションの練習をしても、その前の基本的なことではつまづいてしまうので、なかなかどのように使うか、というところまで到達しません。結果、他のグループの他のメンバーが、リーダーシップをとりながら、日本語と母語を上手にを使って説明し、一緒に会話を作っていくということになります。その仲間とのやり取りを通して、文型の使い方を学んでいけるというというプラスポイントはあるとは思いません。

また、別のケーススタディとして、日本語センターで実施している企業研修の例をご紹介します。企業研修のひとつである某大手企業の日本語研修では、6週間毎日（月～金）朝から夕方までの研修を実施しています。研修対象は同社のエンジニアで、ほとんどの研修生が日本語学習経験が無く、研修後、全員日本へ行くことが決まっています。日本滞在期間は、1ヶ月から2年の間です。内容は、第1課から25課までの語彙・文型をローマ字で教えるほか、ひらがな紹介と読み書きの練習、その業界の基本的専門用語も日本語で教えます。研修の総時間は280時間です。研修終了時のターゲットレベルは、日本へ行ってから通訳なしで、業務・研修が遂行できるレベルです。

この限られた期間と時間で、第1課から25課までの基本文型を使い、日本で業務・研修ができるレベルの日本語でのコミュニケーション力を養わなければなりません。そのために、様々な工夫をしていますが、特に力を入れているのが、積み上げ式に語彙や文型を体系的にできるだけ正確に習得してもらったあとで実施している会話練習です。研修生たちも研修後、日本へ行ってから通訳もつけることなく自力で業務や研修を受けなければならないので必死です。会話の練習にも力が入ります。そのような雰囲気の中、3～4人のグループを編成し、それぞれトピックを与え、グループで話し合っただけで会話を作ります。その方法は、前述の通りですが、1つ違うのは、中間試験と最終試験の際、その企業の人事の方々がいらっしやって、研修生は決められた時間で会話を準備し、人事の方々の前で発表するコミュニケーション試験があることです。ですから、実際にコミュニケーション能力がつかっているかどうか、教師以外の日本人の方の客観的評価を受けることになります。また、研修生が日本へ行った際、各研修生の部門の日本人の方からの評価も後日インドに届くという大変厳しい条件下で日本語研修を実施しています。企業の方からのフィードバックで一番多いのは、「この短期の研修で、日本語が全くできなかった人が、よくここまでコミュニケーションを取れるようになりましたね」という嬉しいものです。

5. まとめ

この研修を通して私たちが学んだことは、基礎の部分を積み上げ式できちんと習得してもらうことは必須であることです。この部分が脆弱だと、いくら運用やコミュニケーション

ンレベルに進んでも、習得しにくくなかなか上達しません。しかし、基礎の部分の習得に教師が正確性を求めすぎたり、積み上げ式のドリルが、意味をなさない、もしくは学生が全く興味を持たない無味乾燥の内容のものだったりすると、そこで日本語学習が嫌になってしまう学生が出てきてしまいます。その結果、ドリルの効果が思うようになくて、日本語の習得が思うようにならず、途中で日本語の勉強をやめてしまう学生も出てしまったりします。

例えば、皆さんも経験があるかもしれませんが、子供の頃、ピアノを習い始めたところまではよかったけれど、バイエルばかり弾かされて、嫌になってピアノをやめてしまった人がどれだけいるか……。バイエルはピアノの基本で必ず皆がきちんと正確に練習しなければならないものであることは間違いないのですが、曲が醸し出すメロディーは、あまり魅力的ではなく、そのような曲ばかり練習させられていると子供のピアノに対するモチベーションが下がり、結局はピアノの練習そのものが嫌になってしまう子が多いのです。忍耐強く練習する子だけが、次へのステップに行けるシステムです。しかしながら、今では、ピアノ教室の教え方も変わりつつあり、バイエルの練習にある子供に、途中で美しいメロディーを持つ有名な曲の一節を子供たちに弾かせてあげるピアノ教室もあるそうです。これによって、子供たちのピアノに対するモチベーションを維持、促進しようというものです。

この例は、日本語教育にもあてはまるのではないかと思います。教師が、語彙・文型等の基本が大切であることを重視しすぎ、基本練習のドリルを繰り返し繰り返し練習をし、それが必ずしもいつも意味を持つものではなかったり、また学生の興味をそそることできないとします。そして、それらの練習を時間の関係等で、更なる運用練習や実際のコミュニケーションにつなげる時間がなかったら、子供がピアノをやめてしまうように、学生も日本語をやめてしまうかもしれません。

ですから、勿論、積み上げ式の基礎ドリルも大切なのですが、それに続く、運用練習とコミュニケーションとしての練習は欠かせないものでもあることを忘れてはいけません。前述の企業研修では、基本的なことが積み上げ式のドリル等によって、教師が考える到達レベルに達していない場合でも、「まだ基本的なことができていない」から次のステップである運用・コミュニケーションレベルの練習をしない、のではなく、アクティビティを試してみたり、ゲームを試してみたり、敢えて会話の練習をしてもらったりして、既習の文型を何とか使ってみる練習をすることによって、もっと基本的なことをきちんとやらなければならないことを研修生に自覚してもらい、その上でもう一度積み上げ式の練習をすると、以前よりも効果が出るなど、トップダウン型の効果を出しています。積み上げ式のドリルが完全にできてから、次の運用やコミュニケーションの練習に行くものである、というお

おまかなプロセスはあるものの、それが「マニュアル」ではないということを教師自覚することが大切なのではないのでしょうか。大切なことは、それぞれの学生の日本語習得状況を注意深く観察し、医者が患者を診て処方箋を出すように、その学生にその時点で必要なことをアドバイスしていく、色々な方法を試してみる、そして導いていくことではないかと思います。この企業研修でも非常に多くのコースを運営してきましたが、すべてのコースがそれぞれの色を持ち、その雰囲気、習得スピード、効果的な習得方法等が違っていました。

日本語を教える時、私たちが忘れてはならないのは、教える対象である学習者あつての日本語教育ということです。学習者を注意深く見て、どの方法が一番適切であるのか、一番効果的であるか、ということを常に考えながら教えることが基本です。授業で使う教科書は、洋服で言うと「既製服」に似ています。「既製服を使うのなら、それをできる限り学習者にフィットしたものにしていくことが教師の役割」（「創造的授業の発想と着眼点」清ルミ）ということではないのでしょうか。「みんなの日本語」は、積み上げ式の教科書とされていますが、教師は教科書をそのまま教えるのではなく、「教科書で教える」のですから、積み上げ式の部分のみで授業が完結するのではなく、「みんなの日本語」からペアワークやアクティビティ、運用練習、コミュニケーションレベルの練習を編み出し、積み上げ式と両立させて習得させていくことができると思います。また、日本語を教える際、基本的なことの理解、基本練習は必修事項だと思いますが、運用練習、コミュニケーションレベルの練習になると、その広がり方が大きく、その内容もその国が持つ文化、生活習慣等により異なってくるため、メインの教科書として効果的なのは「みんなの日本語」のような積み上げ式のもので、コミュニケーション的な内容の教科書は、副教材としてより効果的に使えるのではないかと考えています。また、基本文形の文法の説明や基本練習などが、教科書に記載されていないと、特に教授経験の浅い日本語教師、またはノンネイティブ教師にとって、非常に負担が大きくなってしまいう一方、学習者にとってもつかみどころのない内容の教科書となってしまいうように感じます。

以上、私たちがインドで「みんなの日本語」を使い続けている理由について説明させていただきました。ありがとうございました。